

上田浩二 (獨協大学)

日独の150年 — 相互の視点の変遷とその背景

徳川日本とプロイセン・ドイツとの間で外交関係が樹立してから150年経った今年、さまざまな形で150周年記念の催しが行われている。こうした場合の公式のステートメントでは、日独関係は世界でも例のない友好的で親密な関係にあったと強調されることが多い。とりわけ、ある年齢から上の日本人およびドイツ人には、相互に特別な親近感をいただいている方が少なくないようだ。その一方、若い層にとっては、日本とドイツは限定された分野での興味の対象であっても、強い親近感をいただく者は少数であろう。年齢層によって関心の違いが見られるということは、とりもなおさず関心そのものとその背景が大きく変化してきたことを意味する。150周年記念の年に当たり、こうした日独間の関心の変遷を、整理してみたい。

明治期の日本がドイツに大きな関心を抱くようになったのは、岩倉使節団のプロイセン体験がひとつの出発点であったことは疑いない。近代化を急ぐ日本は、欧米諸国の実情を体系的に調査したこの使節団はプロイセン・ドイツに大きな感銘を受け、多くの面でこれを模範とするようになる。ドイツがとくに進んでいた分野に関しては、ドイツの専門家が「お雇い外国人」として招聘された。日本の近代国家としての枠組み、大学などの知的領域に対する彼らの功績は大きい。その一方、ドイツ側から見れば、日本からの貢献は大きいものではない。それぞれの近代化の過程において、日本はドイツを必要としたが、ドイツは日本を必要としたわけではない。こうした非対称な関係が、その後の日独関係の根底には通奏低音のようにつきまとっている。

異文化がもつ魅力は、さまざまな要素から成り立っているが、大枠としてこれに影響を与えるものとしては、それぞれの時期に特徴的な次のような側面が考えられる。

— 国際的な環境。

たとえば、明治期なら近代化、昭和のある時期なら経済的競争と相互依存、近年ならグローバル化といった、外からの強い圧力。

— 自分自身の社会環境。

社会情勢によって引き起こされた内面志向（大正教養主義に見られるような観念論哲学/人生論への傾斜）、あるいは経済発展の結果としての豊かな社会イメージなど。

— 文化・芸術・学術面での模範としての異文化。

ドイツの場合なら音楽が、この代表であろう。

これらの要素が一定の影響を及ぼす前提条件としては、技術の発展がある。交通手段がさほどに発達していなかったモビリティの低い時代には、媒介者が限られていたため影響は限定的であった。とりわけ映像としての情報が少なかった時代には、書籍が唯一の情報手段であり、見たことのない対象を具体的に理解することは困難だったし、ごく少数の異文化体験者は「特権的な地位」にあった。交通手段とインターネットの発達はこの制約を打ち破り、広い層が情報に接する可能性が開かれた。

この結果、異文化への接し方が変化し、接する対象が飛躍的に拡大し、接する層も広がってきた。こうした変化は、ドイツの日本文化に対するスタンスの推移に如実に見られる。かつて日本

2011 獨協国際フォーラム

文化は、伝統文化として少数の教養階層に強く支持される傾向が強かったが、現在ではドイツでもマンガやアニメが若者文化として定着している。

以上のような現象面とその背景を、実例をまじえながら取り上げていきたい。

上田浩二（うえだ・こうじ）

1947年生まれ。東京大学比較文学・比較文化大学院。早稲田大学語学教育研究所勤務を経て、1993年より筑波大学現代語・現代文化学系教授。ベルリン日独センター副事務総長（2004年～2006年）を経て、ケルン日本文化会館/国際交流基金の館長を勤める（2007年-2011年）。2011年より獨協大学外国語学部ドイツ学科特任教授。その他、NHKラジオ・テレビドイツ語講座講師（1985～99年）、ゲーテ・インスティトゥートの通訳コース、外務省の通訳研修等を担当。近著『戦時下日本のドイツ人たち』（2003）など。